

# 希望の扉を見つけた!



Coパイロット  
脳梗塞・左片麻痺・左視野欠損・高次脳機能障害

**渡部 梨乃さん**

SHENMAHI\_GRM



▲2023年9月しまなみ縦断



▲2023年9月しまなみ縦断



▲2022年6月 明浜

## 梨乃ちゃんとNONちゃん倶楽部の歩み

- 2021年 8月16日 手術
- 2022年 6月26日 明浜イベント初参加
- 7月31日 モンチッチにてタンDEM自転車デビュー
- 9月10日 高知県夜須への旅
- 9月25日 障がい者サイクリングでしまなみ20km走破
- 2023年 9月16日 しまなみ縦走70km走破
- 2025年 5月16日 軽井沢親善大使

2021年8月16日  
私は約二十時間に及ぶ脳動脈奇形摘出術の途中で  
脳梗塞を発症し、左半身麻痺と高次脳機能障害を患いました。

脳動脈奇形と診断を受けたのは、高校二年生の時でした。中学三年生頃から始めていたてんかん発作が異常行動として現れたため、病院を受診しMRI検査や造影検査を行ったところ、右側頭葉に脳動脈奇形が発見されました。家族と一緒に病状の説明を受けた際、医師からは「脳動脈奇形は、いつか破裂して脳出血を起こす可能性がある。奇形自体を手術で摘出するか、放射線治療で小さくするか、薬物療法で経過観察するか決めてください。」と告げられました。しかし、その三つの選択肢はいずれも大きなリスクを伴うものであり、当時十六歳だった私にとって、一人では抱えきれないほど重い選択を迫られました。診断を受けた当初は現実を受け止めることができず、「こうして私なのか」「悪い方向に進めば死んでしまうのではないかと、不安でいっぱいでした。そんな中でも、家族や高校の先生、友人に支えられながら、「病気の根本を取り切り、すっきり終えたい」という思いから、摘出術を受けることを決断しました。診断を受けてから手術前日まで、悔しさと恐怖が日に日に大きくなり、自分の部屋や学校

で、ほぼ毎日のように泣いていたことを覚えています。そして迎えた手術当日。コロナ禍で面会は制限されていたが、手術前に母と会い、少しだけ話すことができました。病棟から手術室までも一緒に歩き、手術室の入り口で別れました。その時に母と交わした「またね。行ってきます。」という言葉と、手を振りながら手術室へ向かって歩いていく瞬間は、今でも忘れることができません。もしかしたら、次会う時には歩けなくなっているかもしれない、もう二度と会えないかもしれない。そんな恐怖を抱えたまま、私は手術台に乗りました。

術後は意識が朦朧としており、自分がどこにいるのか、何をしているのか、手術が無事に終わったのかも分からない状態でした。記憶も曖昧ですが、ICUから一般病棟へ移り、両親が様子を見に来てくれた頃から、少しずつ意識がはっきりしてきました。両親の声を聞いて、安心したのだと思います。しかし、意識がはっきりしていくと同時に、自分の左半身に麻痺が残っていることも理解する

た。さらに、代表の津賀薫さんは、発想力と行動力にあふれ、一人ひとりと丁寧に語り、自信を失っていた私を前向きにしてくれるような人柄でした。

それは、Instagramをきっかけに知り合った佐川陸君です。陸君は私の一歳上で、高校生の時に脳動脈奇形が破裂し、右片麻痺と高次脳機能障害を患いました。同年代で、人生の中で障害を負いながらも前向きにさまざまなことに挑戦する彼の姿は、私にとって希望の光でした。家も近く、何度か会うようになる中で、佐川家の皆さんからNONちゃん倶楽部を紹介していただき、自転車を楽しむことを初めて知り、明浜で行われるタンDEM自転車のイベントに参加することにしました。

最初は「私が本当に自転車に乗れるのだろうか」「その場に馴染めるだろうか」と、不安でいっぱいでした。しかし、イベントに参加されている方々はとても優しく、温かく迎えてくださいました。参加者の中には、車椅子の方や視覚障害の方など、障害を有する当事者やそのご家族が多くいらっしゃいました。また、ボランティアの方々もとてもフレンドリーで、抜群のコミュニケーション力で参加者を楽しませてくれる方ばかりで

ようになりました。一人で寝返りを打つことができない、座ることができない、ご飯を食べることも、着替えをすることもできない。これまで当たり前に分でできていたことが、すべて誰かの力を借りなければできなくなっていました。体重は十キログラム減少し、体力も大きく落ちる中で、リハビリ生活が始まりました。さまざまなストレスが重なり、看護師さんやリハビリの先生に強く当たってしまうこともありました。申し訳ないと思いつつも感情をうまくコントロールできず、「自分が自分ではなくなってしまう」という喪失感に襲われました。また、日常が一気に壊れ、もう健康だった頃の身体には戻れないという現実が、深い悲しみや悔しさ、とまどいが一気に押し寄せ、経験したことのないほど辛い日々でした。

回復期病院では毎日リハビリを行い、さまざまな日常生活動作が少しずつ一人でできるようになりました。嬉しい反面、「もっと綺麗に歩きたいのに」「もっとスムーズに動きたいのに」と、過去の自分と比べてしまい、なかなか前を向くことができない日々が続きました。

手術から約半年が経ち、長い入院生活が終わりました。主治医からは「退院後は色々なところに出かけて、たくさん歩いてね。」と言われていましたが、外出するたびに周囲の視線が気になり、同年代のキラキラした生活を送っている人を見ると強い劣等感を抱いてしまうため、次第に家に引きこもるようになり、辛いなに思いました。「こんなに辛い思いをするなら、手術で助からな



この日は高機能三輪自転車の前の椅子に乗り、パイロットの河上さんに漕いでいただきながら海沿いを走行しました。景色や会話を楽しんだり、他の参加者の方と競争したりと電動自転車の充電が切れていたにも関わらず、最後まで楽しませてくださった河上さんの優しさや、久しぶりに感じた風の心地よさにとても感動しました。

走り切ることができました。そして、2025年5月には、軽井沢で雨の中勾配の大きな坂道を登るといって、これまでで最も過酷な道のりを走りきりました。これらは仲間がいるからこそできた経験であり、私一人では達成できません。発症当時には想像もできなかったような目標を仲間とともに一つひとつ達成していく中で、仲間との深い絆や自信が生まれました。それらは私を大きく成長させてくれたと感じています。

こうした経験を通して、私は次第に「自分の障害を武器に変えよう」と、前向きに障害を捉えられるようになりました。障害があっても挑戦を続け、多くの人に感動や勇気を与えている当事者の姿を見て、私も誰かに希望を届けられる存在になりたいと思うようになったからです。

現在は、新たな夢であるソーシャルワーカーを目指し、大学で勉強に励んでいます。課題やテスト勉強、実習など大変なこともありますが、友人や先生方に支えられながら、楽しく充実した大学生活を送っています。

大学では、ボランティア活動や子ども・若者に関する政策会議への参加、ポッチャサイクルの立ち上げ、タンDEM自転車の普及に向けた研究活動などにも積極的に取り組んでいます。さまざまなことに挑戦する中で、障害があるからこそ伝えられること、そして自分だからこそできる役割がたくさんあるのだと気付きました。

看護師になれなかったことへの悔しさは、今も心の中に残っています。しかし、これまでに学び得た知識や経験はさまざまな場面で生かされており、今ではそれが自分の強みになっていると感じています。

こうして前を向いて歩めるようになったのは、家族や友人、この四年間で出会った多くの方々の支えがあったからです。生きることが辛いと感じていた時期を乗り越え、今は心から「生きていてよかった」と思えるようになり、また、障害を患い、失ったものは決して少なくありませんが、それ以上に得られたものがたくさんあります。これまで私を支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちを持ち続けながら、今後も色々な挑戦をしていきたいです。そして、二年后に社会福祉士の資格を取得し、人々を笑顔にできるソーシャルワーカーになれるよう、前向きに努力を重ねていきます。

